

## 「人それぞれ」発言は哲学対話に何を引き起こすのか

What does “It depends on the person” statement cause in the philosophical dialogue?

小川 泰治（宇部工業高等専門学校）

岩内 章太郎（豊橋技術科学大学）

### 【要旨】

本稿の目的は、哲学対話における「人それぞれ」発言が対話の場に何を引き起こしているのかを分析することである。「人それぞれ」発言はその多様な含意からファシリテーターを「人それぞれ」のジレンマに追い込む。ここに対話が白けてしまいかねないという哲学対話特有の難しさが現れる。それゆえ、「人それぞれ」発言に対してファシリテーターに求められているのは従来の論駁やルール化による禁止といった対処法ではなく、発言をまずは受け止め、話者の意図や含意をよく聴くことなのである。

The aim of this paper is to analyze what “It depends on the person” statement causes in the philosophical dialogue. The variety of implications of “It depends on the person” statement puts the facilitator in a dilemma. Here, a unique difficulty of philosophical dialogue emerges: the dialogue can become a deadlock by the statement. Therefore, what is required of the facilitator is not a conventional method such as refuting the argument or making rules, but to accept the statements and listen carefully to the intentions and implications of the speaker.

### 【キーワード】

哲学対話、人それぞれ、相対主義、ファシリテーション

Philosophical Dialogue, “It depends on the person” Statement, Relativism, Facilitation

## はじめに

哲学対話は見方も考え方も異なる人々が集まり1つのテーマや問いについてともに考える営みである。いうなれば、そこで、私たちは「人それぞれ」だからこそ、対話をする。だが、他方で、対話の場では、自由に話し考えるがゆえに「人それぞれ」にかんする以下のような発言が出てくることもある。「結局、人それぞれだと思う」、「みんな違ってみんないい」、「それも○○さんの考えですよ」、「なにが答えかは定義によって変わるんじゃないか」、「考えや見方に優劣はないと思う」。本稿では、こういった「人それぞれ」発言（以下上記のような発言を便宜的にこう呼ぶ）が哲学対話の場に何を引き起こしているのかを、特にファシリテーターの視点に立って、分析する。後に見ていくように、哲学対話の場になされるこのような発言は、表面上は物の見方や立場の相対性を主張するようになって、じつはその意味や意図を一義的に規定するのは難しい。だがその一方で、対話の場にその発言が放たれることによって、「人それぞれ」であるがゆえに「この問いに答えはない」、「これ以上みんなでも考えても意味がない」という含意を持つものとして受け取られていく。そうして、哲学対話の場の成立根拠を揺るがし、「転覆」させかねない。

本論で明らかにしていくように、「人それぞれ」発言はこういった「転覆」のリスクをはらむ一方で、しばしば実践者によってなされている論駁やルール化といった対応もまた十分ではない。「人それぞれ」発言はファシリテーターにある種のジレンマをもたらすのである。すなわち、この発言に対処するのは、一般に思われているよりも——とりわけ、アカデミックな哲学ではなく哲学対話だからこそ——ずっと難しい。本稿の目的は、この難しさを分析し明らかにすること、そしてそのうえで、この難しさを受け止めることで明らかになる哲学対話の可能性を示すこと、である。

### 1. なぜ哲学対話において「人それぞれ」発言が問題となるのか

まずは「人それぞれ」発言の背景にある社会状況について考えることから始めよう。

現代社会では、さまざまな場面で「人それぞれ」や「みんな違ってみんないい」と語られる。このようなコミュニケーションはすでに広く共有され、身体化された馴染みのあるものとなっていると言えよう。また、それが少なくとも自由や多様性の表象を支えているという意味で、否定しがたい面をもつのも事実である。しかし、石田光規が指摘するように、当たり前の人それぞれと考え、語ることは、多様な「個を尊重する社会」を目指しているように見えて、そのじつ、そこに生まれているのは「人それぞれの社会」である可能性がある。すなわち「主義・主張をぶつけ合うことよりも、対立を回避するために他者に対する批判や意見を憚り、気を遣い合うことに重きを置いている社会」（石田 2022: 33）である。

たとえば、現実世界で起きている難しい問題を考えていこうとする対話の試みが、苦しく、また、何か気まづくなりそうに感じられたとき、「でも、やっぱり人それぞれだよ」と言えば、一定の仕方で場の納得感を形成しつつ対話にゆるい幕引きをもたらすことができるかもしれない。しかし、そこでは自分や相手の意見を真摯に吟味することよりも批判や対立を回避することに主眼が置かれており、互いの意見を正面から受け取っているとは言い難い。そうであるならば、「人それぞれ」発言は、山口裕之が述べるように、「より正しいことを求めていく努力をはじめから放棄する態度」（山口 2022: 140）と変わらないだ

ろう。「『正しさは人それぞれ』は、自分自身の正しさの根拠や理由についても考えない態度を助長する」(Ibid.: 215 f.) ののである。

上記のような状況は、哲学対話の最中の「人それぞれ」発言にも通じている。Marie-France Daniel は、子どもたちが哲学の実践を通して「対話的で批判的な思考」(Daniel 2013: 47) を身につけていくプロセスについて継続的な実践と調査を行い、多くの子どもたちの思考が相対主義の段階に長くとどまり、その先のステップに至らない、と指摘する。なぜ子どもたちは相対主義の段階にとどまるのか。その理由の一つは、相対主義がある意味では「ケア」的な側面をもつからである。すなわち、子どもたちは相対主義的視点を獲得することで、自分の考えや物の見方が絶対的ではないということに気づき、この気づきが他者を尊重し、互いの話に注意深く耳を傾けることを可能にする、というのである (Ibid.: 49)。なるほど、筆者らの実践経験においても、対話の参加者から「いろいろな人の話が聞けてよかった」、「みんなそれぞれ違う考えや見方をしていることがわかった」といった感想を聞くことも多い<sup>(1)</sup>。この意味において、哲学対話には人それぞれだから楽しい、という面が確かにある。人それぞれの状態にとどまり対話をするとは、互いの自由が尊重され、深刻な対立や批判が生じないという点で快適な状態である、とさえ言えるのかもしれない。

しかし、Daniel によれば、相対主義的な発想はすべてを等価に扱うことを助長する姿勢に帰着する。すなわち、「絶対的な相対主義とは、恣意性や無関心、現状維持を意味し、疑問を持たず、優先順位をつけずにすべてを受け入れることにつながるかもしれない」(Ibid.)。これはまさに、石田 2022 や山口 2022 を参照しながら確認してきた「人それぞれ」という言葉遣いのもつ意味と重なる指摘である。すべての意見や視点が等しく尊重されると言えば聞こえはよいが、ともすれば、互いの発言を吟味し、批判し合う「知的な努力」(Ibid.) は不要となり、考えや立場の違いを越えて対話を重ね、その先に相互了解や合意を形成していく可能性が潰えてしまう。さらに言えば、後述するように、「人それぞれ」発言の影響が対話の場に広がれば、参加者は考えること自体をやめてしまい、対話そのものが「転覆」してしまう危険性すらある。人それぞれを確認しあうことに終始する状態は対話の探求が進むこととは相反する状態なのである。

以上見てきたように、「人それぞれ」発言は哲学対話の実践者にとってなんらかの対応によって乗り越えることが求められる課題であると言えるだろう<sup>(2)</sup>。では、これまでに実践者たちは、「人それぞれ」発言にどのように対処してきたのだろうか。代表的な対処の仕方を確認してみよう。

## 2. 「人それぞれ」発言はいかに対処されてきたか

苦野一徳は、「相手を言い負かす」ための「帰謬法」の代表例として、「人それぞれ考えはちがう」をあげ、これを「時と場合によってちがう」という発言とともに、「相手の主張を相対化してしまう論法」であるとしている (苦野 2017: 74 f.)。苦野によれば「何でもかんでも『人それぞれ』をいい立てるだけの議論は、哲学対話の名に値しない」(Ibid.: 161)。そこで、苦野が哲学対話において重視するのは、異なる意見の持ち主が「共通了解」を見出し合う「本質観取<sup>(3)</sup>」という方法である。フッサール現象学を理論基盤にして、相対主義に負けない論理を、あらかじめ哲学対話の手続きに組み込んでいるのである。

そうすると、参加者から「人それぞれ」発言が出た際にも、哲学的-原理的な応答が

——より強く言えば論駁が——可能となる。このやり方は哲学の中でオーセンティックなものである<sup>(4)</sup>。まさにフッサールが論理学の領域における当時の心理主義に対抗したように、現象学の中核原理を使用することで、「人それぞれ」発言を乗り越えようというのである。これを「人それぞれ」発言に対する原理的論駁と呼んでおこう。

他方で、論駁とは異なる対処を示唆するものもある。たとえば『ゼロからはじめる哲学対話』では、対話に参加する際の「困りごと」として、「結局人それぞれじゃないか、と思ってしまう」を取り上げている。

わたしたちの考えは人それぞれです。それは当たり前で、尊重されなければならないことでしょう。ですが、それは哲学対話ではあくまでスタート地点であって、ゴールではありません。わたしたちは人それぞれの考えを持っていますが、そこから何か共有できることはないか、それぞれだとしたらどこが違うのか、問いにできることはないか、と共同で探求を深めていきます。これが哲学対話の楽しみでもあります。

そしてそもそも、本当に、わたしたちは「結局、人それぞれ」なのでしょう。そう思うのならば、ぜひそのこと自体を問いにして、哲学してみることも面白そうです。(河野編 2020: 195)

最初の段落では、私たちが人それぞれであることは「ゴール」ではなく「スタート地点」である、と述べられている。実際、哲学対話の開催時に「人それぞれ」発言について同様の趣旨のルールや心がまえを説明するケースもあるため<sup>(5)</sup>、これを「人それぞれ」発言のルール化と呼んでおきたい。ルール化により「人それぞれ」は対話を行う際の前提となり、対話中に人それぞれ意見が異なるという端的な事実を確認しあうだけで探求が進まないといった事態をあらかじめ防止することができる。

「人それぞれ」発言に対する原理的論駁や、「人それぞれ」発言のルール化は一定程度有効であるだろう。あるいは、上記以外にも、「たしかに人それぞれと言える面もあるけれど、今はそれで終わりにせずもう少しみんなで考えよう」と受け流し、当初のテーマに引き戻す対処もありうるかもしれない。しかし、ここで指摘したいのは、これら一見するとうまい対処が実質的には「人それぞれ」発言を対話の場から締め出す効果を持っている、ということである。ファシリテーターの側にそのような意図がないにせよ、これらの対処から参加者が読み取るのは、その主張を対話中に展開することへのネガティブな印象だからである。それゆえ、上記引用の2段落目で展開される、人それぞれを「問いにして、哲学してみる」可能性は、実際の現場では起こりにくいのである。

もちろん、熟練のファシリテーターであれば、実際は参加者の様子を見つつ対話を丁寧に進めていくにちがいない。その過程で『では、なぜ人それぞれになるのか?』とか、『それでも同じような考えを持つ人がいるのはなぜか』とか、『その中でどうやって一緒にやっていけばいいのか』といった議論へと発展<sup>(Ibid.)</sup>していくこともあるかもしれない。しかし、論駁やルール化のような対処法が無反省にマニュアル化されるなら、それはさまざまな意図からなされる「人それぞれ」発言を簡単に処理しすぎている。このような対処は、ある種のジレンマを引き起こしかねないうえに、発言のもつ多様な含意をとりこぼし

てしまいかねない。前者のジレンマについては第5節で論じることとして、次節では、「人それぞれ」発言のもつ含意についていくつかの類型を取り出し、考えてみたい。

### 3. 「人それぞれ」発言の類型

本節では「人それぞれ」発言を、筆者らの実践経験を手がかりに、二つに分類する。一つは、その発言内容について本当にそう思っており、それを主張するためになされる場合である。これは対話の場に相対主義的観点から問いを投げかけるものであるため、哲学対話への根本疑義としての「人それぞれ」発言と呼んでおくこととしよう。もう一つは、それ以外の、すなわち発言内容以外の意味や意図が含まれている「人それぞれ」発言である。

#### 3.1 哲学対話への根本疑義としての「人それぞれ」発言

「人それぞれ」発言は、哲学対話そのものや哲学対話で扱われている個別のテーマに向けられる。それが哲学対話そのものに向けられる場合、「そもそも対話をして最後は結局、人それぞれに終わるだけなんじゃないか」と哲学対話全体の意義に疑念を投げかけることになる。およそいかなる問いに対しても、結局は人によって異なる意見があるだけだとすれば、対話を通じて共通理解や合意といった「答え」を目指していくことに意味はない、あるいは、そんなことは不可能でさえある、というのである。これを論理的に精緻にしていけば、哲学的相対主義が現われるだろう。互いに共通の尺度をまったく持てないとしたら、了解、吟味、検討、批判など対話に不可欠なプロセスが不可能になってしまう。哲学対話そのものに向けられるこの類型は最もラディカルな「人それぞれ」である。

「人それぞれ」発言が個別のテーマに向けられる場合はもう少し穏当なものである。たとえば、「幸せとはなにか」を考えている最中の「幸せって人それぞれですよ」というような発言がこれにあたる。何を幸せと感じるのかは人によって異なるのだから、確かに幸せの本質を普遍的に規定することは難しいようにも見える。これはそれほど突飛なものではなく、むしろ少なからぬ人が日常的に感じていることだろう。しかし、それぞれの意見が主観的な幸せに回収され、決して交わらないのであれば、そのテーマをとりあげて対話をしようと思っている参加者たちのモチベーションは大きく損なわれるにちがいない。

それゆえに、こういった発言が真摯になされればなされるほど、対話の場には「（「人それぞれ」発言が正しいとすれば）このテーマについて対話を続けることに何の意味があるだろうか」という疑問が広がっていくことになる。そうなれば、ファシリテーターは一度テーマについての対話を止めてでも、この問題提起に応答せざるをえなくなるだろう。

#### 3.2 根本疑義ではない「人それぞれ」発言<sup>(6)</sup>

##### (1) 論破する／言いくるめる

「人それぞれ」は相手を「論破」するために有効な一撃である。「それはあなたの主観的な意見であって、結局、人それぞれですよ」と言ってしまうと、それだけで建設的な議論の土台は崩れる。人それぞれだけが真理となり、他のすべての考えは主観的かつ相対的な意見にすぎなくなるのである。また、「人それぞれ」発言はテーマについての発言とは異なる視点からの問題提起として対話の流れを止める機能を持つ。そのため目下の対話の熱量が高ければ高いほど、この外側からの発言に注目が集まることになる。このことを

利用して、論破してみせる自分を認めてもらいたい、あるいは、対話の場に対する反抗的な姿勢を表現したい<sup>(7)</sup>、という願望が含まれることもあるかもしれない。

### (2) ついていけない／乗れていない

先にも取り上げた「幸せとはなにか」という問いなどは確かに「感じ方は人それぞれ」という発言を誘発しやすい。だが、「それでも共通するなにかがあるのではないか」と考えてみたり、「私が幸せだと思うものとあなたが幸せだと思うものはなぜ分かれるのか」と考えてみたりすることは十分に可能である。それでも参加者が「人それぞれ」発言に至るのは、その対話の場についていけないかったり、うまく乗れていなかったりするからであるかもしれない。このとき、「人それぞれ」発言はその内容を強く主張したいがためというよりも、(発言の順番が回ってきたので仕方なく)何か言おうとして選ばれる汎用的な表現である可能性がある。だとすれば注目すべきは、発言内容そのものではなく、対話の場の状態、すなわち気づかぬうちに一部の参加者たち——対話に乗れていないのは発言をした本人だけではないかもしれない——が探求から置いていかれていないか、ということの方である。この意味での「人それぞれ」発言は、いま対話で話されていることをうまく理解できず、十分に問いについて考えられていない、ということ暗に伝えており、ファシリテーターおよび対話の場に向けた一種の SOS サインである、とも言えるだろう。

### (3) 対立したくない／批判したく(されたく)ない／めんどくさい

第1節で確認したように、「人それぞれ」発言は、批判しない／批判されないための、傷つけない／傷つかないための予防線として用いられる。それは哲学対話にゆるい幕引きをもたらす。この場合、「人それぞれ」発言はそれ以上の応酬をシャットアウトするためのマジックワードとして機能している。これ以上話し合っても、互いの批判がエスカレートするかもしれないし、場の雰囲気気まぜくなるかもしれないから、もう止めましょうという合図である。つまり、批判や対立を避けたいがために、その場の空気を読んで、「まあ、でも、人それぞれだから...」と言うのである<sup>(8)</sup>。

こういった含意での「人それぞれ」発言は、議論となっている問題について実際に苦境に置かれておらず、いま真摯に考えずとも済むマジョリティの側から出ることもあれば(Cf. 山口 2022: 218)、逆にマイノリティで当事者の側が、当事者ではない人たちとこれ以上話したくないという場合になされることもある。その意味で、「人それぞれ」発言を誰が言ったのか、あるいは言えてしまったのか、という点にも注目する必要があるだろう。

さて、以上の分類について実践的に重要だと思われることを確認しておきたい。それは、対話の場全体にとっては、3.1 と 3.2 は同様に場を白けさせる効果を持ちうる、ということである。いずれの場合も、一部の参加者もしくは参加者全体の対話へのモチベーションを大きく削ぐからである。それだけではない。「人それぞれ」発言の意図をファシリテーターや参加者がその場で瞬時に把握するのは容易ではない。そのため、発言者の意図がどこにあるのかにかかわらず、他の参加者からすれば、(3.1 で見たような発言の字義通りの意味に近い) 哲学対話の意義そのものへの根本的な挑戦(「人それぞれなんだから、これ以上話

し続けても意味がない) がなされたと受け取られることも多い。すなわち、いったん「人それぞれ」発言が対話の場に放たれてしまうと、それは対話の場全体に対する複雑な影響を持ち始めるのである。そうして、対話の継続が極めて難しくなることにもなる。次節ではこのことを「転覆」という比喻を通して考えることにしよう。

#### 4. 「人それぞれ」発言は対話を「転覆」させる

「人それぞれ」発言によって対話が「転覆」とはどのようなことか。そのことを「子どものための哲学」の文脈でリップマンが「探求の共同体」をヨットの航海になぞらえたことを手がかりに考えてみたい。

それ[探求の共同体]はつまり、生徒たちが敬意を持ちつつ互いに意見を聞く、互いの意見を生かしながら、理由が見当たらない意見に質問し合うことで理由を見だし、それまでの話から推論して補い合い、互いの前提を明らかにするということである。[.....]対話は論理に従おうとし、ヨットが向かい風を斜めに受けてジグザグに前に向かうように、まっすぐにではなく進んでいく。(リップマン 2003=2014: 22)

ヨットが探求の共同体で、風がそのつどの探求の方向性（を形作る参加者たちの発言やふるまい）である。探求はファシリテーターが無理矢理方向を変えようとしてもうまくいかない。むしろファシリテーターはそこに吹いている風の流れを読み、その流れを利用しつつ、目的地を目指して帆を張る。その過程で議論が拡散し目的地が見えなくなることもある。あれば、テーマや問いから大きくずれて目的地への到達は困難になっている場合もあるかもしれない。しかし、それでもヨットが風を受けて進めていけば——私たちがなんらかの仕方で考えることを続けてさえいけば——、少なくとも探求は継続している。つまり、ヨットが「迷子」になったとしても、そこに風がある限り、探求は継続できるのだ。これが、リップマンが「探求が誘う場所へと進み続ける」(Ibid.) と述べることの意味である。哲学対話にとって探求の進みが「ジグザグ」であることに何の問題もない。風の変化を読み、「互いの意見を活かしながら、理由が見当たらない意見に質問し合う」よう促すことで、うまくヨットのバランスを保ちつつ航海を続けていくのがファシリテーターの仕事である。

ところが、「人それぞれ」発言が引き起こす状況は、「迷子」のような事例とは質的に異なると思われる。それはむしろヨットが「転覆」しかかる経験である。すなわち、探求の共同体が挫折し、探求そのものが継続できなくなることにほかならない。単に目的地を見失うだけではなく、「人それぞれ」発言を受けて、このまま対話を続けても「結局人それぞれ」なのだと思えば考えてもしょうがないという雰囲気が全体に広がることで、参加者の思考が停止してしまうのだ。

たとえば、議論についていけないことの SOS サインとしての「人それぞれ」発言を簡単に流してしまえば、それはその発言者を対話の場から無反省に排除することになり、少なくともその発言者の思考を停止させる。また、哲学対話そのものの意義を根本的に問うものとして「人それぞれ」発言が提起され、その発言が多く参加者の同意を得るなら、それは全員に考えるのを止めさせる言葉になる。さらに、対立するのを恐れるあまり、建設的な批判や吟味を止めて、その場を人それぞれでおさめようと思えば、それも考えること

の放棄と区別がつかなくなる。「人それぞれ」発言は、単なる「迷子」ではなく「転覆」を引き起こしかねない。ここに「人それぞれ」発言に特有のラディカルさがある。

さらに注目すべきは、「人それぞれ」にしばしば付いて回る「結局」という言葉である。それは対話の行く先を先回りして出てきている言葉である。「結局、人それぞれ」という言葉は、人によってバラバラな意見に帰着するだろう対話の終わりへの予感から、いままきに動きつつある対話の始まりに疑問を投げかけている。「結局、人それぞれ」なんだから、わざわざ「問い」を立てて、場合によっては問いそのものをさらに問い、急がずゆっくり「答え」を探していくことに意味なんてあるのだろうか、と。つまり、「答えは人それぞれ」と発言していたとしても、「人それぞれ」発言は、本質的に、そこで言われている「答え」よりも「問い」そのものの無効を示唆するものなのである。いかなる問いも立たないとすれば、探求は挫折するほかない。

## 5. 「人それぞれ」のジレンマ

では、ここまでの議論を踏まえて、ファシリテーターの視点でどのように「人それぞれ」発言に向き合えばよいのかを考えていこう。しかし、これまで論じてきたことから明らかになるのは、むしろその対処は容易ではない、ということにほかならない。すなわち、(1) 「人それぞれ」発言にうまく答えられなければ対話を継続することができず、「転覆」しかねない。しかし逆に、(2) 「人それぞれ」発言にうまく対処しすぎるとファシリテーターの権威が強まりすぎ、対話の場の自由な雰囲気をも崩してしまう。そして(1)と(2)いずれにおいても、対話は白けてしまいかねないのである。このようなファシリテーターが直面する葛藤を「人それぞれ」のジレンマと呼んでおこう。

(1) から考えてみよう。どれだけ言葉を重ねても「人それぞれ」や「みんな違ってみんないい」に帰着するだけなら、対話の意義を確保することは難しくなる。すでに見たように、「人それぞれ」発言は、その真意がどうであれ、哲学対話をする事そのことの意義を根本から問うものとして解釈されうる。それゆえ、ファシリテーターの側が沈黙し、その問いかけに十分に応答できなければ、やがて参加者は考えつづけることの意味を見いだせなくなり、対話は「転覆」してしまうだろう。

しかし、転覆を恐れたファシリテーターが原理的論駁やルール化でうまく対処しすぎた場合、(2) に直面することになる。すなわち、ファシリテーターの側があらかじめ準備してきた応答をぶつけることの妥当性が問題になるのである。「ファシリテーターは対話を主導したり指導したりするのではなく、主役は参加者」(河野編 2020: 134) なのだから、「人それぞれ」発言に対して必要以上に権威的なふるまいを見せてしまえば、全員が対等かつ自由にとともに考えるという哲学対話の基本姿勢を揺るがしかねない<sup>(9)</sup>。往々にして参加者はファシリテーターの見せる権威的なしぐさや介入に敏感である。

むろん、熟練したファシリテーターであれば、対話の場の雰囲気を壊さない仕方で説明することもできるかもしれない。しかし、そのうまい対応は、探求の共同体にとって、そこに吹いている風に逆らわない自然なことだと言えるのだろうか。一見するとうまい対応の背景では、この発言が哲学上の極めてラディカルな問題につながっていて、対話の場を「転覆」させかねない一言だからこそ、「人それぞれ」発言に過剰に反応し、なるべく早くこの言葉から離れて対話の場を成立させたいと焦るファシリテーターの気持ちが先行して



はいないだろうか。つまり、ヨットの「転覆」を恐れるあまり、本来緩めるべきスピードをむしろ早め、そこを切り抜けようとしてしまっているのである。

しかしながら、かといってそこで対話のスピードを緩め、真摯に応答しようと向き合い始めれば、そこでは再び(1)のような「転覆」の危険性が生じることになる。そして、以上のことを自覚したとしても、そのことで「人それぞれ」のジレンマがただちに解消されるわけではないし、「人それぞれ」発言が「転覆」と紙一重であることに変わりはない。このようなジレンマにこそ本稿が明らかにしようとしてきた「人それぞれ」発言の難しさが端的に表れている。

「人それぞれ」のジレンマは、これが哲学対話の実践であるがゆえにとりわけその困難が際立つものである。アカデミックな哲学であれば、相対主義に対する原理的な論駁を行うことは正当かつ不可欠な手段である。相対主義の論理を破綻させることができれば、人それぞれを越えた普遍性やそこに至るための対話の可能性を擁護できる。あるいは、そういった原理的な論駁を念頭に置いたうえで、「人それぞれ」発言のルール化によって発言自体が現れることを防ぐことも、建設的な議論のためには十分に認められるだろう。だが、哲学対話という場におけるこうしたふるまいは、探求の共同体を委縮させてしまいかねない。哲学では問題にならないようなことが哲学対話では問題になるのである<sup>(10)</sup>。

## おわりに

本稿では「人それぞれ」発言への具体的な対処法にはあえて踏み込まず、その発言の持つ困難を一つのジレンマとして示してきた。しかし、最後に、これまでの議論から導かれる非常にシンプルなアイデアを述べておきたい。それは、「人それぞれ」発言がなされたとき、まずは端的にそれを受け止め、「なぜそう思ったの」と問うこと、そしてそれを通して発言の意味や意図がどこにあるのかを理解すべく、その声を真摯に聴くことである。これは、「人それぞれ」発言以外の発言についてであればファシリテーターが行うことができている対応を、「人それぞれ」発言に対しても丁寧に行う、ということにほかならない。もちろん、実践のデザイン上さまざまな制約がありはするが<sup>(11)</sup>、マニュアル的な対応ではなく、可能な限り「人それぞれ」発言に含まれている問いを確認し、そこからともに考えていくことを選択肢としてもつことは十二分に可能であるはずだ。

本論で見てきたように、哲学対話の場での「人それぞれ」発言には多様な含意がある。「人それぞれ」発言をマニュアル的に処理してしまえば、その発言の意味や意図（もしかすると、第2節の類型には収まらないかもしれない）を拾い損ねてしまうだろう。「人それぞれ」発言に含まれる「論破したい」、「乗れていない」、「批判されたくない」といった参加者の心情はファシリテーターにとっては悩みのタネとなりうるものである。しかし、それは、哲学対話の場がみんなでもとに考える場であるとはどういうことなのか、もしかしたら一部の人にとってはいまの場がともに考える場たりえていないのではないか、ということを確認するための重要な機会を与えている、とも言えるのではないか。問いかけの過程で哲学対話への根本疑義が真摯に表明されていると分かれば、その日のテーマを差し置いてその問いを扱うことで、むしろ対話は「転覆」することなく、新たな目的地に向けて進んでいくことになるかもしれない。また、それが別種の意図から発せられたものであるならば、それは対話の場全体のあり方の見直しを迫る重要な声になるかもしれない。

以上の方向性は、哲学対話は自らの足場を揺るがすような問いすらも受け止められるのか、という根本的な問いかけを実践者に投げかけるものである。「人それぞれ」のジレンマを解消する簡単な方法はない。「それって結局、人それぞれじゃないですか」、「なにが正しいかについてはみんな違ってみんないいと思います」。こういった発言は、哲学対話の実践者——もちろんここには筆者らも含まれる——に、対話の「転覆」や白けと紙一重のところ、あなたの哲学対話の場はこの問題を引き受けられるのか、と問いかけているのである。

\* 本稿著者二名は共同第一著者 (co-first authorship) であり著者間に貢献度の差はない。

\* 本研究は JSPS 科研費 JP20K14125、2022 年度豊橋技術科学大学 高専連携教育研究プロジェクト (課題番号 1601)、大幸財団人文・社会科学系学術研究助成 (助成番号: 11104) の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 石田光規. 2022. 『「人それぞれ」がさみしい: 「やさしく・冷たい」人間関係を考える』 筑摩書房.
- 岩内章太郎・小川泰治. 2022. 「哲学対話に「答え」はないのか: 子どもの哲学と現象学的哲学対話の観点から」『現代生命哲学研究』第 11 号、pp. 57-81.
- 河野哲也編. 2020. 『ゼロからはじめる哲学対話』ひつじ書房.
- 苦野一徳. 2017. 『はじめての哲学的思考』筑摩書房.
- 西研. 2019. 『哲学は対話する: プラトン、フッサールの〈共通理解をつくる方法〉』筑摩書房.
- プラトン. 1966. 『テアイテトス』田中美知太郎訳, 岩波書店.
- 山口裕之. 2022 『「みんな違ってみんないい」のか?: 相対主義と普遍主義の問題』筑摩書房.
- Daniel, Marie-France. 2013. “Relativism: a threshold for pupils to cross in order to become dialogical critical thinkers,” in: *childhood & philosophy*, vol.9, no. 17, pp. 43-62.
- Lipman, Matthew. 2003. *Thinking in Education* (2nd ed.), Cambridge University Press. (河野哲也・土屋陽介・村瀬智之監訳. 2014. 『探求の共同体 考えるための教室』玉川大学出版局.)

## 【註】

- (1) こういった感覚は「哲学対話に答えはない (から楽しい)」というしばしば見られる説明ともつながっている。この見解の批判的検討については岩内・小川 2022 を参照されたい。
- (2) Daniel は相対主義を乗り越え、子どもの思考をより洗練していくために、教師に向けていくつかの質問の形式を提案している (Daniel 2013: 57)。しかし、本稿で取り上げている「人それぞれ」発言は単に相対主義的思考に対し正面から問いかけることによって乗り越えられるものではなく、より多様な含意がある。本論の議論展開が Daniel のような具体的な質問の仕方の検討などとは異なるのはそのためである。
- (3) 本質観取という方法の詳細については、西 2019 の第 13 章および第 14 章を参照されたい。そこで西は「正義」を例にとって本質観取を行なっている。
- (4) たとえば、プラトンの『テアイテトス』では、ソクラテスとテアイテトスが、「知識とは何か」

という問いをめぐって議論を進めていく。この問いに対して、テアイテトスは「知識とは感覚のことである」という説を提起する。ソクラテスによれば、テアイテトスの知識感覚説はプロタゴラスの人間尺度説と重なる。周知のようにソクラテスは、相対主義もまた論理的には相対的なものにならざるをえないとして、プロタゴラスの立場を退けている(プラトン 1966)。しかし、プラトン以降、相対主義はさまざまにバージョンを変え、哲学的論争の場面に姿を見せている。特に現代における相対主義的な思考の広がりについては山口 2022 の第 1 章などを参照されたい。

- (5) 同書の執筆者の一人でもある永井玲衣は、自身の主催する哲学対話では、ルールの一つとして次のように人それぞれについて言及するとしている。「ひとそれぞれ」から始めよう／ひとそれぞれはあたりまえ／でも「ひとそれぞれ」をゴールにしない／だからあなたの意見が大切」(永井玲衣.2021.「哲学対話と場の安全性」cotree 公式. <https://note.com/cotree/n/n5779135d444d> (最終閲覧日：2023 年 3 月 6 日))
- (6) 以下で紹介する三類型についてさらに掘り下げるなら、「自分の意見を受け入れてもらえる相手がほしい」「他者から共感してもらいたい」といったコミュニケーションへの強い期待が潜んでいるかもしれない。(以上の点は査読の際の指摘を踏まえて追記したものであり、査読者の方の有益なコメントに感謝したい。)
- (7) 学校の必修授業で哲学対話を行う場合など、対話の参加者が必ずしも自発的に対話に望んでいるわけではないケースでは、対話の場の発言の真意がその発言の内容とはずれていることがしばしばおきるように思われる。たとえば、授業内で人それぞれであることを言い立てる生徒や学生は、もしかすると、ただその授業や教員が嫌いであることを表明しているだけなのかもしれない。
- (8) この点に関して、豊橋技術科学大学大学院の橋本悠衣から重要なコメントを得た。橋本は「人それぞれ」発言に至る具体的理由として、(1) 特定の問いに関心がないため、対話するモチベーションがない。本質が明らかになるまいがどうでもいいという姿勢、(2) 自分の中で十分に検討されていない(あるいは言語化を怠っていた)問いが提示された場合、他者に自分の思考の浅さが露呈するくらいなら、いつその場を破壊してしまおうという逃げの試み、(3) 問いが自分にとって重要なものであればあるほど対話の難易度が上昇するため何も言えなくなってしまう、最後は「人それぞれ」で逃げる、というものを挙げている。
- (9) むろん、対話の場であれば「何を言ってもいい」し、それに対してファシリテーターが場の自由な雰囲気優先を優先してなんら対応をすべきではないということではない。たとえば、「人を傷つけることは言わない」というルールは、場の安全性を確保するため、そのルールに反するとふるまいがあった場合にファシリテーターが毅然とした対応をすることは必要である。だが、「人それぞれ」発言に対して強く対応することは、安全性の確保が目的ではなく、ファシリテーター自身が対話の「転覆」を恐れるあまりに過剰な対応をしているケースであるように思われる。
- (10) 同様に哲学という冠をつけない「対話」の場でもこれほどには「人それぞれ」発言は問題とはならないように思われる。なぜならば、人それぞれであることはまさに前提として、お互いの違いを楽しんだり、共感したりすることにも対話としては十分に価値があるからである。
- (11) たとえば、「人それぞれ」発言をただ単に取り上げるだけでは、今度は他の(ときに多くの、人それぞれだと思わなかった)参加者からすれば「早く本題に戻りたい」と思わせることがあるかもしれない。また、時間の制約といった物理的な課題もある。こういった実践のデザインの検討については本稿では紙幅の都合で十分に検討ができなかったため、今後の検討課題としたい。